

## 親の因果が子に報う

アーチ型の間口の広いトンネルがあり、そこは寒々とした薄暗い闇と静寂に支配されていた。闇はトンネルの中央部に吊してある壊れたガス灯の点滅でかえって深まるばかり、そして静寂を破るものと言えは、ずきずきするこめかみを湿った石畳に押し当てることで、その痛みを和らげようとしている哀れな若い娘の苦悶に満ちた泣き声だけだった。一方、ほとんど信じられないことだが、この娘からほんの数歩しか離れていない所では、大勢の人々が大通りのまぶしい街灯の光を浴びながら行き来していた。ところが、こうした夕暮れ後の風景は、とあるイングランドの大製造業都市(二)の中心部では珍しくも何ともないのである。

レナード・ヴィンセント(三)は、学生仲間の社交クラブから近道して家路を急いでいたとき、この痛ましい泣き声がたまたま耳に入り、トンネルの入口付近で立ち止まった。最初は、その光景

ジョージ・ギッシング(作)  
松岡光治(訳)

自体に大して心を動かされなかったが、ちようどそのとき、一陣の突風が吹いてガス灯の炎がパツと燃え上がり、上を向いた娘の顔がかすかに照らし出され、それをちらっと見た彼はドキッとして強い関心を呼び起こされた。娘の黒い、ぎらぎらした目、肩まですふふさと垂れている長くて黒い乱れ髪、輪郭こそ美しいものの、時には苦悶の表情で不気味に見え、時には死人のように青白く見える顔——こうしたものは今まで見たことがない光景だったので、彼はまるでメドゥーサ(三)の顔を見たかのように、一瞬、身動きができなくなつた。とはいえ、彼が態度を決めかねたのは、ほんの一瞬だった。涙にむせびながら悲しみに心を奪われるあまり、彼女が自分の存在に気づいていなかったたので、彼は彼女の方へ歩み寄り、そつと肩に触れてみた。すると彼女はすぐさま振り返り、彼をじつと見つめた。あわてた彼女は必死になって感

情を顔に出すまいとしたが、大粒の涙が頬を伝わって流れるのを即座に抑えることはできなかつた。悲しみだけでなく空腹までもが彼女の美しさを損ない始めているかのように、両方の頬は青白くなつており、幾分かけた感じがした。彼女はプライドの高そうな落ち着きのない目で青年の顔をじつと見ていたが、その努力の甲斐もなく、堅く結んだ唇をふるわせていたので、彼はこの上なく深い同情の念を呼び起こされた。数分間、二人は黙つたまま立つて互いに見つめ合つていたが、やがてヴィンセントが口を開こうとしない娘の決意を読み取り、おずおずとはあつたが、彼女に話しかけた。

「悲しみの原因を教えてもらつてもいいかな？ 無礼な奴だなんて思わないでね。尋ねるのは君を助けることができる——いや、助けないからなんだ」

この青年は、社会的地位が低い者たちに話しかける時はいつも幾分ぶつさらばうな態度になつていたので、この時の口調には自分でも少し驚いた。目の前にいる娘の姿勢や、すり切れた質素な服を見ると、自分より下の階級に属していることは明らかだつた。それにもかかわらず、彼はこの娘の視線にたじろぎそうになり、実際の階級は自分より下ではないのではなからうかと思つたほどである。

彼の同情を買つた娘はしばらく決断がつかないように立つてい

たが、依然として表情を変えることなく、やがて低い声で早口に素つ気なく答えた。

「ひとりしてください。御親切には感謝しますが、助けは必要ありません」

レナード・ヴィンセントは同情しているにもかかわらず笑みをこぼした。

「それはどうかな」と彼は言った。「ぼくを信用してくれないんですか？ 君の信頼を求めているのは単なる好奇心からだけではありませんよ。間違いなく助けてあげることができると思ひます。そうさせてもらえればの話だけだね」

彼女はもう一度すばやく返事をしたが、その口調は先ほどのとは違つていた。

「御親切には感謝いたします。こんなに優しく話しかけられたのは久しぶりですから。ですが、助けは必要ありません。ホントに必要ないんです」

まだ表情が変わらぬ彼女の顔をのぞき込んで、青年はまた微笑ほほえんだ。

「プライドの高い人ですね」と彼は言った。「こんなにプライドの高い人に会つたのは久しぶりです。ぼくもプライドは高いですよ。似たもの同士ということで、打ち明けてみませんか？」

今度は彼女が笑みをこぼす番だったので、はるか昔は幸せだつ

たと何となく思わせるような表情で、一瞬、その顔が明るくなった。このように彼女が打ち解けた気配を見せただけで彼には十分だった。引き続きヴィンセントがせきたてるので、彼女は二、三度ちよつと躊躇ちゆうちよしてから、彼の要求に今にも応じるような顔を見せた。

「悲惨な話をしては御迷惑でないでしょうか？ お話しなくても、すべて御存じでは？ でも、おそらく、あなたは立派な家庭と立派な御両親をお持ちなのでしょうね。それじゃあ、手短に述べてみましょう。また泣いてしまうとしますが、そうした方が私のプライドにとってはよいかもれません」

それで、彼女は若い時のこと——イングラッド南部の小さな市場町で過ごした楽しい子供時代や学生時代について、そして誠実な友を持つことの喜びについて簡単に語った。小作農だった父親が死に、美人だった母親が金持ちの地主の懇願に負けて再婚するまでは、幸せ一杯だったそうである。母はプライドが非常に高かったので衝動的な行動に走ってしまい、その結果として厳しい罰を受けることになったという。ひとり娘のローラ・リンドンリンドンは義理の父に憎まれたが、それは彼女が昔の粗野な友人たちと縁を切ろうとしなかったことが主な理由であった。この地主——がさつで下品な性格だった——が哀れな義理の娘をひどく虐待したため、とうとう彼女は自分の生活に我慢できなくなったようだ。

「この私に何ができたでしょうか？ かわいそうな母のためにも自殺はできませんでした。それで家出することに決めたわけです。いつも一番の親友だった同い年の女の子と連れだって北部にやって来ました。それから数週間は、針仕事で得た少ないお金でなんとか暮らしていましたが、かわいそうにリジーは厳しい生活に耐えられなくなり、そして——私のものを去ってしまったんです。あの子がどうなったかなんて訊きかないで。四考えるだけで恐ろしいわ。そのあと一度だけ彼女の姿を見かけました——ああ、神様、もう二度と再び彼女とは会いませんように！ 私ですか？ 御覧のとおり、生きてはいますが、ただそれだけです。生活するのに十分なお金を稼ぐこともできなくなりました。体もどんどん弱っているような気がします。今晩は捨て鉢な気持ちになつて出てきたんですが、その理由も行き先も分かりません。これが私についての話です。助けることなんかできませんよ。でも、助けてやろうと考えてくださって感謝しています。ずいぶん遅くなってきたようですわ。お休みなさい」

また目に込み上げてくる涙を隠したい思いで、彼女はすぐさまヴィンセントに背中を向け、次の瞬間には立ち去ってしまったところだった。彼は急いで追いかけて、再び彼女を立ち止まらせた。

「でも、助けてあげることにはできませんよ。助けないわけにはい

きません、ミス・リンドン」

最初、彼は衝動的にお金を渡そうとしたが、そんな申し出は歓迎されず、承諾させることもできないと、すぐに悟った。それで、代わりに彼女に針仕事を、なんとか生計を立てることができただけの縫い物の仕事を見つけてやろうと考えた。そちらの申し出は即座に感謝の言葉とともに受け入れてもらえた。

「それから」とヴァインセントは別れ際に言った。「また会えますよね？ 遊びに行ってもいいですか？」

「感謝いたします」と彼女ははっきり、しかし淑やかな口調で答えた。「でも、いらつしやらない方がよろしいですわ。ずっと針仕事がありますもの。このたびは仕事をいただき、本当にありがとうございます」

そうして二人は別れた。

ローラに仕事を見つけてやることに關して、レナード・ヴァインセントは約束を守ったが、数週間もすると、自分の所には来ないでほしいという彼女の願いに従っていないことが判明した。しかし、そうこうするうちに、この新しい男の友人と話す時に、生来のプライドの高さゆえの余所余所しい態度が消えるまで時間を要したものの、彼女の方もだんだん朗らかになり、気兼ねなく何でも彼に話すようになった。

とうとうヴァインセントは、今や抑えきれないほど強烈になった

衝動のなすがままに、「愛しているよ、君を妻にしたい」とローラに言ってしまった。彼女が自分に対して無関心でないということとはすでに分かっていたが、最初は感謝の念によって点火され、今では心の中で激しく燃えて上がっている彼女の身を焼き尽くすような情熱については、さらに、彼女が冷やかな尊敬という仮面の下で激しい愛情を抑えるのに長い間どんなに努力してきたかについては、ほとんど気づいていなかった。激しい愛情を抱いていたローラも、相変わらず自制心の方がまだ優勢であった。ほどなくして、彼女もやつと遠慮がちに愛を告白したが、あとで取り返しのつかない過ちだったと分かるようなことだけはしないように、じっくり考えてほしいと恋人に対して懇願した。しかし、彼はどのような結果になろうが無頓着で、その時の勢いに押されて父親に会談を求め、ローラの来歴や現在の境遇を嘘いつわりなく説明しながら、同時に自分たちの結婚を認めてくれるように頼んだ。

老ヴァインセント氏は引退した綿糸紡績工場主だった。彼の莫大な富は自分の事業に対する献身によって蓄えられたものである。(五) その性格は、もちろん初めから物欲的であったが、今ではそれに鼻持ちならないプライドが加わり、昔以上に利己的で屈な性格になっていた。最初は息子の知らせを聞いて激怒した老ヴァインセント氏であったが、やがて考え直して息子に——父親同

様にプライドが高かったものの、下劣なほどではなかった息子——に対し、怒るよりも効果的な手段として卑劣な悪知恵を使つてやろうという気になった。

老ヴィンセント氏は一つの条件を付けて結婚に同意するふりをした。それは、父から財産分与<sup>(六)</sup>があるかもしれないという期待などは抱かずに、まずは自分自身の努力で妻を養えるぐらいになることという条件であつた。

ローラは表面的には落ち着いて見えたが、実際には激しく苦しみもだえるような不安を感じながら、会談の結果を待っていた。

「尋ねてくれましたか？」と、彼女は恋人が返事をもらつてすぐ会いに来てくれたとき、せきたてるように大きな声で言った。

「万事うまくいったよ、君」と彼は答えた。「でも、ぼくたちは二人ともまだ若いよね。お互いに約束を忠実に守ろうじゃないか。結婚するまで君はぼくの家で暮らせばいい。両親が面倒をみてくれるから。ぼくは外国で一年ほど過ごしてくるよ」

ローラは自分の激しい感情と立派に戦い、嬉しそうな顔をしようとする。それから一週間後、彼女は老ヴィンセント氏と同じ屋根の下で暮らしていたが、レナードはすでにアメリカに向けて船出してしまつてた。

\* \* \* \* \*

二年が経過した。今回、我々はオールド・イングランドではなく、ニュー・イングランド<sup>(七)</sup>でレナード・ヴィンセントの姿を見ることになる。学年歴がちようど終わったばかりで、夏休みが始まるうとしており、今日は学校生徒が全員集合させられている。生徒たちの勉強と（我らが共通の友、レナードもその一人となつてた）先生たちの仕事の成果が披露される日であつた。卒業生のクラスはみな御満悦の様子で、こつした式典によくあるように、男の子たちは立派な服を着たわりには動きがぎこちなく、女の子たちは自然のままの魅力と人工的な魅力<sup>(八)</sup>を結合させ、まばゆいばかりに——それはもう、今にも大人の女性として花開きそうな、はちきれんばかりの多数の蕾<sup>(九)</sup>がついた華麗な花束のように——光かがやいて見えた。

それでは、このクラスの首席であるミニ・ウォレンという若い女性に注目してみよう。ミニは背が高くはなかつたものの、均整のとれたプロポーションで、時おりモスリン<sup>(九)</sup>の服の下から顔をのぞかせる青の蝶リボンがついた上靴から、後頭部に鎮座した（簡単だが上品に渦巻状に結びあげた）ふさふさの茶髪に至るまで、それはもう優雅そのものだった。顔はきりつとした目鼻立ちとは言えないが、掛け値なしの美貌を有している。普段は最高に魅力的な笑みを浮かべているが、この時は集まった人たち全員から注視されているという意識からか、とりすました表情に

なっていた。彼女の頬はおそらく普段の式典よりは少しだけ赤らんでいて、花びらのようにすべすべで柔らか、唇に關しては——これはもう筆舌に尽くしがたい。すべての人たちの目が、なかでも彼女の先生であるレナード・ヴィンセントの目が、ミニーに釘づけされていた。しかし、先生の目にちらりと見て取れた喜びの感情は、ミニーの頭を字識ゆたかにするように——美貌に恵まれた顔とみごとに調和するように——尽力してやった人が当然ながら抱くプライドとは違った感情(二〇)を示唆していなかっただろうか？

二年という時間の経過は何をもたらしたか？ レナード・ヴィンセントはローラとの約束を決して忘れず、何週間も定期的に愛情のこもった手紙を書き送っていたし、婚約者の方も誠実な愛と気高い人格を示すような手紙を返していた。ところが、突然、彼女の手紙が来なくなった。その後すぐレナードが父親から受け取った手紙に理由が説明されていた。父親が熱のこもった慰めの言葉や不自然に思えるような悔やみの表現を使って手紙で述べていた内容は、ローラが急に熱病にかかって、すぐさま亡くなってしまったということである。この突然の訃報にレナードは深い悲しみをまったく感じなかった——ここでそう言うとおく必要があるだろうか？ 彼はショックを受けるには受けたが、恋人ならば抱くような悲しみを感じはしなかった。彼は、ローラが自分の妻

になることを常に願って暮らしていると分かっているかぎり、彼女を裏切ることなんか性格的に絶対できない男であった。しかし、彼女がそばにおらず、いろいろと考えることもあったからだろうが、彼女を失うという運命に甘んじることができるよう、彼の気持ちには変化が生じていた。実のところ、初めから彼の愛には自分で想像できないほど、認めたくないほど、単なる憐れみや自己満足の要素が多く含まれていたのである。イングリッドを離れてすぐさま、彼はローラが自分の伴侶としてもっと知的な女性であればいいのという自分の気持ちを自分でも認識していた。妻になる予定の女性が単に献身的であるだけで満足できるほど、彼は立派な心の持ち主ではなかった。彼の憐れみの心は完璧なものではなかったので、相手との接点をもっとたくさん必要だったのだ。ローラの死を告げる手紙を受け取った後すぐ、彼が自分で意識しながらも別の女性との新たな愛を——その種子はすでに蒔かれていたのだが——育み始めていたのは、このような経緯が あったからに他ならない。ヴィンセントはハンサムでもなかったし、いかなる意味においても女殺しとは言えなかったが、それでも彼をよく知る人たちには文句なしに感じのよい男と思われるような外見——快活で愛想のよい態度、かなりの体力、洗練された教養が加わると、ますます彼を文句なしに感じのよい、魅力的な男にしてしまうような外見——を備えていた。陽気で落ちついた

性格でもあったので、彼は父親が自分に課した運命を即座に甘受してしまい、たちまち生徒たち、特に若い女生徒たちの間で文句なしの人気者になった。

卒業式の出し物は大成功であった。歌唱、朗読、暗唱はどれも、集まった保護者や友人たちの間では、楽しかったと大評判だった。とうとうすべてが終わり、人々の群れもばらばらになり始めたが、ヴァインセントが自分の部屋で最後の片づけに精を出している、扉をノックする音が聞こえた。すると、「どうぞ」という返事も待たずに、ミス・ウォレンが部屋に入ってきた。

「で、ヴァインセント先生、今日は満足いただけましたかしら？」

「文句なしだ、ミス・ウォレン。とりわけ君に対してはね。実にチャールミングだったよ、君は」

ミニーは先生のお世辞を無視しているように見えたが、いつもの流暢な口調で続けて言った。

「ああ、ヴァインセント先生、グレイス・ウィリアムには——彼女の詩文の暗唱ぶりには——気を留められましたか？ それはもう優雅でした！」

「間違はなくね。でも、他にも暗唱を発表した人がいましたよ。『それはもう優雅でした』では済まない人がね」

ミニーはいらいらしたように見せかける可愛い態度で首を横に

ふった。

「腹の立つ先生ですこと！ お世辞の言葉なんか望んでいませんよ、まったく、先——。いえ、先生と言うところでしたが、私はもう生徒じゃありませんから、先生と呼ぶことはいたしません」

「結構ですよ、ミス・ウォレン。じゃあ、お返しに私も君の名前からミスを取って、これからは『ミニー』と呼ぶことにしよう」

ミニーは少し顔を赤らめ、彼に背を向けて窓の外を見た。しかし、その後すぐ、また振り向いてヴァインセントの顔を見た。

「来学期もまた、ここにいらつしゃいますか、ヴァインセント先生？」

「断定はできませんね。状況次第です」

ミニーは陽気な笑い声を上げ、今にも部屋から出て行かんばかりに、扉の上に手を置いた。

「それって、腹の立つほど漠然とした、お得意の哲学的な言いまわしですね。時が来れば、はつきりしますわ。でも、みんな帰ってしまったので、ホントに、私も急いで帰宅しなくちゃなりません。では、失礼します」

彼女は扉を開け、大急ぎで立ち去るふりをした。一瞬、レナードは決めかねたかのように見えたが、すぐに彼女の方へ歩み寄った。

「ミニー！」

彼女は立ち止まり、無関心そうな態度を装って振り向き、「何かおっしゃいましたか、先生？」と言った。

「じゃあ、『よい夏休みを』とも言わずに、君は行ってしまふのかい？ 驚いたね、ミス・ウォレン」

「もう私をミスでお呼びにならないと思っておりましたわ」と、彼女は商人のような口調で答えた。

「あ、忘れていた。『さようなら』と冷たく言う以外には何も無いのかね、ミニー？ これが最後で、もう会うことがないかもしれないというのに」

このように告知されてミニーはハツとしたが、それはかろうじて認識できる程度のものであった。

「まあ、私は遠くへ行ったりしませんわ」と彼女は答えたが、多分その時の状況を考えると不自然に思えるほど、ちよつぱり真剣な口調であった。「学校がまた始まつても、私は地元に残まるでしょう」

「でも、ぼくは多分そうしないでしょね。永久にイングラランドへ戻ることになるだろう。ここにはずいぶんと長くいたから」

「それじゃ、もう私たちアメリカ人にはうんざりなさつたのですか？ まあ、そうですね、私たちって愚かな人間ですもの。では、さようなら」

彼女は繊細な白い手を差したが、それはほんの少し震えていた。レナードはその手を取り、唇まで持ちあげてから、そっと放してやった。いつものようにミニーは樂しげに笑った。

「そうやってイングラランドの人たちはさようならをするのですか？ さぞかし立派な騎士道精神をお持ちなのでしょうね」

「いや」と、レナードはミニーに近づきながら真剣に言った。「ぼくたちは別れをさういうふうに告げたりしません。さようならをするつもりが絶対ない時にだけ、さうするんです」(二)

「へーえ！ それじゃ、こうしたいいつもの挨拶を交わさずに、私は失礼しなければなりませんわ！」

彼女は背を向けて扉の方へゆつくりと歩いた。すると、ヴィンセントはたった一歩で彼女の横に立ち、その手を自分の手で握つた。振り向いた彼女は頬のバラ色を一段と深め、ただ彼の顔を見つめるだけで、何も言えなかつた。

「ミニー」と、レナードは真剣な低い声で言った。「ぼくの気持ちは分かっているよね——知らないふりをしてるけど。この手をずっと握つていてもいいかい？」

彼女は、非常に珍しいことであつたが、目を地面に伏せ、いくぶん聞き取りにくい声で答えた。

「そんなお願いをされては、ここに長居しすぎることになりませんわ」



「とても綺麗な手だね。もう一度キスしてもいいかい？」  
ミニーが返事をしなかったので、彼は沈黙を承諾の証と解釈した。

「とても綺麗な唇だね、ミニー。キスしてもいいかい？」  
この質問はほとんどささやくような声でなされた。彼女は言葉で返事をしなかったが、顔をあげた時の薄茶色の目の表情が、ミニー・ウォレンはその美しさといはずらっぱさも含めて、すべて彼のものになったことを雄弁に語っていた。

結局のところ、彼はアメリカを離れなかった。父に宛てた手紙には、この年老いた綿糸紡績工場主が親戚として恥じる理由など少しもない家庭の娘を妻にめとつたと書かれていた。その返事で、この父は強情さがなくなった息子に対し、胸襟きょうきんを開くことはなかったにせよ、ともかく財布は開いてくれた。老ヴィンセント氏は、自分自身の理由もあつてか、レナード・ヴィンセントにイングランドへ帰ってきてほしいと特に思つてもいなかった。少なくともしばらくはアメリカに留まり続けたいと息子に言われた時も、さほど悲しみを覚えなかったのである。

\* \* \* \* \*

それでは、ローラ・リンズンはどうなったであらうか？　レ

ナードが父の手紙で知らされたように、本当に死んでしまったのか？　いや、それは金だけが自慢の老父が、自分たち父子にとつて不名誉でしかないような結婚の計画を挫折させるために企てた、残酷な策略だった。この老父はローラが死んだことを手紙で知らせると同時に、権謀術数に富む男の所へ行き、レナードからの手紙を偽造させた。その手紙は、ローラが教育を受けていないため、レナードもしばらく前から二人が互いに不釣り合いではないかと考えるようになったこと、これまではこの問題について沈黙し、そうした疑念を乗り越えようと努力してきたが、最後はローラを婚約から解放してやるのが自分の義務だと思ふようになり、そうなつても彼女にふさわしい夫がすぐ見つかるだろうという内容であった。同時に、自分は前の住まいから引越したが、彼女は新しい住所を知らない方がよからうと、手紙には述べられていた。偽造は非常に巧妙で、見栄えのしない手紙も、今まで受け取っていた手紙とそっくりだったので、この哀れな娘は偽装されたものとは一瞬たりとも思わなかった。老ヴィンセント氏は抜け目なく、慎重に、いつもこの上なく親切に見える態度でふるまっていたし、レナードが成年(二二)に達したら即座に二人が夫婦の契りを結ぶように願つてはつきり言っていたので、よけいに彼女は信じて疑わなかった。結果はまさに父が予期したとおりになった。ローラは、悲しみに数日間ほど苦悩を味わつたあ

と、突然、海を渡ってアメリカに行けるだけの金を都合してくれるかどうか義理の父に尋ねたが、拒絶されるや、夜の間に家から姿を消し、その後は音信不通になった。老父は策略が完全に成功したことを確信し、満足げに両手をこすりながら、別の問題に注意を向けた。

一方、今ではヴィンセント夫人となったミニー・ウォレンがきちんと主婦の務めを果たしていたニュー・イングランドの小さな家庭は、平和で快適そのものだった。きれい好きで几帳面なミニーは、いつも自分自身の外見に注意を払っており、自分と関係のある物や人に対しても、すべて自分同様に非難の余地がないようにしようと、さらには妻としてもっとよい主婦になることで、夫を本当に幸せな男にしてやろうと、固く心に決めていた。レナードはゆったりした気持ちで優雅な日々を送っていたが、のんきな性格であったので、優秀な幼妻の愛情あふれる心づかいにとっても満足していた。たしかに時おり昔の故郷のことや、かつては自分にとって非常に大切な気がしていた女性のことについて、振り返って思いを巡らすことがあるにはあったが、なるようにしかならないという哲学<sup>(二三)</sup>のためか、取り返しのつかないことに対しては即座に自分を慰めることができていた。また、そうした回想をする時でも、おそらく、彼が一連の思考を通して達した結論は、彼の父が哀れなローラの希望をくじくために利用した結論

と、それほどかけ離れたものではなかっただろう。

\* \* \* \* \*

一月のある日の午後のことだった。ニュー・イングランドの天気は変わりやすいということでは有名だったが、最近はその名声を必死に保とうとしていた。街路は近ごろ降った雨でまだぬかるんでいたが、数時間ですら太陽の光を出し惜しんでいた空は、依然としてどんよりした感じで、間違いなく吹雪が近いぞという警告を発していた。いかなる種類であれ、陰気なことが大嫌いなヴィンセント夫人は、この機をとらえてブラインドを下ろし、いつになく早い時間ではあったが、シャーンデリアの明かりをともした。

「ねえ、レナード」と、チャームिंगな幼妻は夫の足もとにある低い腰かけに座り、彼の膝の上で両手を組みながら言った。「お願いだから、その本を脇へやって、少しは私の相手をしてちょうだい」

レナードは、彼にとつては珍しいことだが、今日はずっと口数が少なく、何か難解きわまる小説を朝から読みふけていた。ヴィンセント夫人がそれとなく言ったように、これは間違いなく今日の天気と何らかの関係があった。お願いされた彼は本を脇へ放り出し、手足を伸ばしてから、少し退屈そうにあくびをした。

「うーん、そうだな」と彼は答えた。「実を言うと、かなり気がふさいでいるんだ」

それから、突然ある考えが浮かんだかのように、彼は立ち上がった、そばの床の上にあった新聞を手にとった。彼は新聞をめくって娛樂欄を見るなり、少し大きな声で読み上げた。

「グロープ座<sup>(二四)</sup>は『大草原の野蠻人』の最終日——つまりバラエティー座<sup>(二五)</sup>は『ジェム・トンブソンの驚異の物まね』とミス・ウイリアムズによる十八番<sup>(二六)</sup>の歌——ちえっ！ コミック座<sup>(二七)</sup>は滑稽歌劇<sup>(二七)</sup>——ああ、少しはました。お題は『アング夫人の娘』<sup>(二八)</sup>か。どうだい、ミニー？ 今晩はこの劇場で過ごそうよ」

ニュー・イングランドの若い娘らしく観劇が好きだったミニーは、慎み深い表情を装っていたものの、反対しているような感じではなかった。

「そうね、レナード、確かに久しぶりだし——」

「それで結構！」と、夫は口をはさんで言った。「夜食<sup>(二九)</sup>もそちらで取ろうじゃないか。ちよつと貸し馬車を予約してくるね」

やがて準備が完了し、貸し馬車も到着した。ほどなく二人は舞台の真ん前の席にゆつたりと座って、緞帳<sup>(三〇)</sup>が上がるのを待ちかねていた。ミニーが人前に姿を現す時によく見られた現象だが、

そうこうするうちに数多くの小型<sup>(三一)</sup>双眼鏡<sup>(三二)</sup>の焦点が何も知らない彼女に集まっていた。レナードは徐々に屈託のない快活さを取り戻していたが、オーケストラが有名な楽しい曲の演奏を始める頃には、本日の特に愉快な出し物を心ゆくまで楽しむ準備が完全にできていた。

すべてが素晴らしかった。歌劇<sup>(三三)</sup>の主演は有名なスターで、その歌声で劇場全体を魅了した。すっかり演技に夢中になっていたミニーは、突然、夫がハツとするのを感じ、同時に舞台上の騒動にも気づいた。どうしたのだろうか？ 「ああ、何でもありませんよ。ただ、コーラスの一人が気を失っただけです。御覧なさい、舞台から運び出されていますよ」と、彼女の隣りの人たちが言った。ミニーがレナードを見ると、その顔には彼女が今まで一度も見ることがないような、青白い、心配そうな表情が浮かんでいた。眼前の些細な騒ぎについては一考だにせず、彼女は夫の腕に手を置いた。

「どうしたの、レナード？」彼女はささやき声で尋ねた。「気分でも悪いの？」

「何でもない、何でもないよ」と、彼はあわてて返事をした。「ほんの一瞬にすぎなかった。でも——劇場を出ても構わないかな？」

「すぐに出ましよう。私のシヨールを取ってちょうだい」

二人は席を立って劇場をあとにしたが、舞台上の演技は何事にも邪魔されなかったかのようについていた。外に出ると、ヴェインセントは心変わりしているように見えた。

「ミニー」と言った彼の声はわずかに震えていた。「ひとりで家に帰ってくれないかい？ 君の楽しみを邪魔するとはホントに馬鹿だったね。今はもう大丈夫だ。このまま帰宅すると時間がもつたないから、訪問するって何度も約束していた町の友だちに、この機会を利用して会ってこようと思うんだ」

初めは抗議していた彼女も、レナードがいらいらした素振りを見せ始めたので、最後は言い張るのをやめ、彼を残して家に帰った。

吹雪になりそうだった空も今までなんとか持ちこたえていた。しかし、今はもう白い薄片が大気中にちらほら見え始め、やがて雪が降りしきるようになった。レナードは友人を訪問するつもりなどない様子で、頻繁に懐中時計を見ながら、劇場の前を急ぎ足で行ったり来たりしていた。彼の頭の中では昔の記憶がよみがえっており、眉をひそめた心配そうな表情は何か激しい感情がうごめいていることを語っていた。

とうとう十時の鐘が鳴り、人々が群れをなして劇場から出て来だした。彼は劇場に沿って走っている狭い、薄暗い通りを急いで歩いて行き、まるで誰かを待っているかのように、楽屋口の前で

立ち止まった。すぐに扉が開いて、コートにくるまった人影が次々と現れた。彼は前を通る人々の顔をじっと見ていたが、誰も見覚えがないようだった。しかし、ついに背の高い女性が踏み段を降りて、しばらく逡巡したあと、暗い通りを歩いて行った。その顔はレナードに見えなかったものの、歩き方は見間違えるはずがないものだった。新たに降った雪の上を軽やかな、すばやい足取りで彼は彼女のあとに続いたが、二人が街灯にかすかに照らされた地点まで来ると、彼は彼女のすぐ近くまで行き、手で触れてみた。彼女はあわてて振り返り、彼の顔を穴があくほど見つめていたかと思うと、彼の首に両手で抱きつき、わなわなと震えながら泣きじゃくった。

「お姿は見えました——あなただと即座に分かりました！ あるまじきこと——あまりに薄情なことですよ！ でも、こうやってまた会えたのですから、すべて赦してあげますわ」

彼女はすすり泣きながら、できるだけ早口で途切れ途切れに話していたので、彼女が話し終えるまで、彼はひと言もしやべれなかった。やがて彼は首から彼女の両腕をそつと取り除いた。穴があくほど彼を見つめていた彼女は、相手の顔が幽霊のように青白いのに気づいた。彼はゆっくりりと、困難を伴うかのように語った。

「ローラ、ぼくのことを考えては駄目だ。ぼくたちは二度と再

び会ってはいけないよ。君がぼくと一緒にいるのを見た女性は妻なんだから」

彼は黙りこんだ。彼女の顔から放たれていた半ば喜ぶような、半ば非難するような眼光が、突如として激昂した狂気のira、みに変わったからである。彼女は何か話そうとしたが、できなかった。レナードは彼女の表情におびえ、控え目な口調で話を続けた。

「聞いてくれ、ローラ。ぼくが悪いんじゃない。ぼくは聞かされたんだ、君が——死んだって」

彼女は彼の両手を自分の両手で軽く握り、話すというよりは、ささやくように言った。

「大した問題じゃありません。どうでもよいことよ。そのとおり——私は死んだのでした！」

それから、彼女は一生懸命に自分を抑えようとしているかのよう、に、非難めいた口調ながらも穏やかに語った。「それで、すぐに立ち去りたいのですね——私と昔話もせずには？ 私には話すことがたくさんあるんです。さあ、私の家に来て、少なくとも一時間ぐらいは一緒に座って話をしてください」

彼は彼女の声に抵抗できず、何の返事もなかった。彼女がサツと向きを変え、道案内をしたので、彼は苦勞しながらも彼女のあとに続いて行った。その時には雪もほとんど降り積もり、吹

雪がヒューヒューと狭い街路を通り抜け、家々に白い吹きだまりを作り始めていた。レナードは自分たちがどちらの方角へ進んでいるのか分からなかった。雪とみぞれが顔に当たり、彼の前方をほとんど飛ぶように進んで行く背の高い、黒い人影を見失わないようにすることが難しかったからである。時おり彼女は振り返って、彼がまだ付いてきていることを確認し、その都度もっと速く歩くようにと手で合図した。こうやって二人がしばらく歩いてい

たとき、レナードはどこへ行こうとしているのかを確かめるために目を上げてみた。二人とも普通の道路からはずれてしまい、周囲には数軒の家しか見えなかった。嵐は恐ろしげに荒れ狂っており、雪はすでに歩くのが困難になるほど深く積もっていた。彼は立ち止まって彼女に叫んだ。

「ローラ、これ以上は行けないよ。君はどこに住んでいるんだ？」

彼女は彼の方を振り向かず、ただ手で合図をしながら、「もう少し先よ」と叫ぶだけだった。

レナードは自分の居場所がまったく分からなかった。この上なく当惑しながらも、彼はまだ付いて行った。ついに二人は短い階段の最上段の所に来た。その下には長い、平坦な、白い小道のようなものが見えた。二人とも同時に立ち止まった。レナードは目をこらして吹雪と暗闇の先を見ようとしたが、突然、後ろに引き

下がった。

「ローラー！ どこへ行くんだ？ うわあー、川じゃないか、ここは！」

彼女は気が狂ったような、かん高い笑い声で応じ、彼の首を両手で激しくつかみ、階段の下へと彼を引きずり込んだ。彼は必死にもがいて抵抗しようとしたが、それも徒勞に終わった。彼女が狂気による馬鹿力を出していたからである。川へ落ちて行く音、薄い氷の膜がひび割れる音、階段の一番下で水しぶきが上がる音が聞こえたかと思うと、すぐに静寂がすべてを包みこんだ。深く積もった雪がまもなく川をまた滑らかな白い表面に戻し、神秘的な川底が「親の因果が子に報う」<sup>(10)</sup> という判決の立会人となった。

### 【訳注】

- (一) 作者が学生時代を過ごした新興産業都市のマンチェスター。  
 (二) レナード (Leonard) の語源はドイツ語で「勇敢なライオン (lion + hardy)」「ヴィンセント (Vincent) のそれはラテン語で「征服する (conquering)」」。  
 (三) ギリシヤ神話に出てくる三人姉妹の怪物ゴルゴンの一人 (Medusa)。

頭髮は蛇で、黄金の翼と真鍮の爪を持ち、見る者を石に変えた。

(四) 当時の統計によれば、都市で働く針子の約四分の一（生活を支えてくれる夫や親のいない針子の場合半分近く）が、低賃金と重労働ゆえに副業として売春をしていたという。

(五) 老ヴィンセント氏は「自分の腕一本でたたき上げた男 (self-made man)」の典型であるが、こうした自助の精神は自由放任主義<sup>レフト・フリーダム</sup>で美化されると同時に、それが内包する利己主義はよく批判の対象になる。

(六) この場合は婚姻によって継承的に財産権が移転するように処分される財産分与 (marriage settlement) のこと。

(七) 米国北東部の地方で六州 (Connecticut, Maine, Massachusetts, New Hampshire, Rhode Island, Vermont) を含む。中心都市はボストン。

(八) 若さゆえの魅力と化粧ゆえの魅力の意。

(九) 羊毛や綿などの単糸で平織りした柔らかい薄地の布。日本ではメリンスとも呼ぶ。

(一〇) 生徒ではなく、大人の女性として見た場合の愛情。

(一一) 中世ヨーロッパの騎士道的恋愛 (courtly love) では、騎士が貴婦人に礼節をつくして絶対的献身を誓う時に、貴婦人の前にひざまずき、差し出された手にキスをする。

(一二) 当時のイングランドでは、二十一歳の成年 (age of majority) に達するまでは、父の同意なしに法的な契約ができなかった。

(一三) 自然主義作家ギッシングの哲学は、人間の境遇、行為、出来事などを含めて、すべての事象は人間の意志や力ではどうにもならない運命に従って必然的に生ずるという宿命論 (fatalism) であった。

(一四) 作者が知っていたボストンのワシントン・ストリートのグローブ座 (Globe Theatre, 1871-73) は一八七三年の火事の翌年に再建されたもの。

(一五) ポストンのコート・ストリートにあったパレス劇場 (Palace Theatre, c. 1891-1931) の前身。

(一六) ポストンのコミック座 (Theatre Comique, 1865-69) はグロブ座と同じ通りであったが、一八六九年にアデルフィー劇場 (Adelphi Theatre) に改名されている。

(一七) オペラ・ブッフ (opéra bouffe) は十九世紀フランスのオペレッタの一ジャンルで、茶番狂言風の喜歌劇。

(一八) 『アンゴ夫人の娘』 (La fille de Madame Angot, 1872) は、フランスのオペレッタ作曲家、ルロック (Alexandre Charles Lecocq, 1832-1918) の代表的なコミック・オペラで、日本でも浅草オペラ (1917-23) のレパトリリーに入っていた。

(一九) 観劇後の軽い晩餐 (after-theatre supper) のこと。

(二〇) イングランド教会の祈祷書 (Common Prayer) における「十戒」の文句 (I the Lord thy God am a jealous God, and visit the sins of the fathers upon the children) の一部。これは旧約聖書の「出エジプト記」二〇章五節と三四章七節、および「民数記」一四章一八節で使われている語句であるが、「ヨブ記」二二章一九節、「エレミヤ書」三二章一九節、「エゼキエル書」一八章二節では逆に、罪の結果である災いは罪を犯した者の子孫ではなく、本人自身が受けるべきものだと書かれている。

### 【作品と作者について】

本邦初訳。ジョージ・ギッシング (George Gissing, 1857-1903) が十九歳の時に書いて一八七七年三月一〇日付けの新聞『シカゴ・トリビューン』

に掲載された処女短篇。原題は「父の罪 (The Sins of the Fathers)」。

ギッシングはヨークシャー州の町、ウェイクフィールドの薬剤師の長男として生まれた。子供時代に秀才の誉れが高かった彼は、十五歳の時にマンチェスターのオーエンズ・カレッジに入学し、古代および現代の言語と文学で高い能力を発揮し、オックスブリッジの学者としての将来を嘱望されていた。

しかし、オーエンズ・カレッジの最終学年を迎えた十八歳のとき、十七歳の貧しい孤児 (であるがゆえに、カレッジ近くのパブで自活のために春を売ることがあった) ネル (Marianne Helen Harrison, 1858-88) と恋に落ちた。本短篇の冒頭場面では、街の女に墮する直前と思われるローラ・リンドンに、そのネルの影響を見ることができるところが、ギッシングはネルを援助するためにカレッジのロッカー室で盗みを働き、それで逮捕されて放校処分となり、学術的な人生を歩む可能性を断られた。釈放後、彼は恥辱を受けた場所から逃れるために、一八七六年九月にアメリカへ渡ることになる。

ギッシングのアメリカ生活は一年あまり続いた。最初にポストンで一ヶ月を過ごしたあと、彼はマサチューセッツ州のウォルサムに移り、高校教師の地位を得てフランス語、ドイツ語、英語を教えた。一八七七年三月、ギッシングは何も言わずに学校をやめたが、その理由はネルから帰国を願う手紙をもらっていた彼が一歳年下の女学生 (Martha Barnes) と深い仲になることに対して良心の呵責を感じたからだと言われている。このことも、本短篇の主人公レナード・ヴィンセントが渡米後に高校教師になり、婚約者ローラのことを忘れて女生徒のミニニー・ウォレンと結婚する点に照らして考えると非常に興味深い。学校教師を辞したあと、ギッシングは突如としてシカゴに移ることになるが、そこで金に窮して

書いた処女作が本短篇である。

原題の「父の罪」を、その典拠である祈禱書の「親の因果が子に報う」の中で捉えるならば、これはモーセが神から与えられたとされる二枚の石板に書かれた「十戒」の第二戒、すなわち偶像を作つて崇拜することに対する戒めを指していることになる。主人公レナードの父、老ヴィンセント氏は労働者階級から独立独行の自助の精神で綿糸紡績工場主にまで成り上がった男だが、こうした場合によくあるように、彼が偶像崇拜しているのは富の邪神 (Mannon) である。「神とマモンの両者に仕えることはできない」という新訳聖書の「マタイの福音書」六章二四節に照らせば、強欲の化身である富の邪神マモンを崇拜する父が犯した拝金主義的な罪の報いは息子に課されると解釈できるだろう。

しかし、見落としてならない点は、ギッシングが老ヴィンセント氏と息子のレナードだけでなく、そのレナードが似たもの同士だと言つたローラ・リンドン、そして貧乏に我慢できず愛のない再婚をした彼女の母親までも、「プライドの高さ」を共通点として強調していることだ。無論、それはよい意味での「誇り (proper pride)」ではなく、「高慢 (false pride)」という悪い意味で使用されている。キリスト教において高慢は精神的な死をもたらす七大罪 (seven deadly sins: pride, covetousness, lust, anger, gluttony, envy, sloth) の第一のものである。「おこる者は久しからず」〔箴言〕一六章一八節〕という格言を想起するまでもなく、ギッシングは高慢の先に破滅しかないと結末におけるレナードとローラのセンセーショナルな死によって示したかったのではあるまいか。